2011年度

国語

（問題）

〈H2305BY16〉

注意事項

1 試験開始の指示があるまで、**問題冊子**および**記述解答用紙**を開かないこと。

2 試験中に問題冊子の印刷の読みにくい箇所、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。

3 **マーク解答用紙**記入上の注意

(a) 印刷されている**受験番号**を確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。

(b) 解答用紙の解答欄は、すべて**HBの黒鉛筆**または**HBのシャープペンシル**でマークすること。

(c) 解答は指定された解答欄にマークし、その他の部分には何も書かないこと。

(d) マーク欄には、はっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで**ていねいに**、消し残しがないようによく消すこと（砂消しゴムは使用しないこと）。

（例）

マークする時	●良い	◎悪い	○悪い
マークを消す時	○良い	◎悪い	○悪い

4 **記述解答用紙**の所定の欄（**二箇所**）に、**氏名**および受験票に記載されている**受験番号**を**正確に**記入すること。受験番号は、右詰めで記入し、番号欄に余白が生じる場合でも、番号の前に「0」を記入しないこと。

（例）

３８２５番

⇩

万	千	百	十	一
	3	8	2	5

※ 数字は**読みやすいように、はっきり記入**すること。

読みにくい数字は採点処理に支障をきたすことがあるので、注意すること。

数字見本	
0	
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	
9	

5 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

伝統的な味、あるいは味の伝統ということがいわれてきた。しかし、それらはたんに伝統と言いっぱなしにされたわけではない。そこでは、くりかえし「伝統」という抽象的であいまいなものが、「古き南部」や「昔のニューイングランド」や「少年時代」という具体的イメージに読みかえられ、最終的に「お袋の味」にすべてが回収されていった。もちろん、「お袋の味」や「少年時代」あるいは「古き南部」といったものは、それ自体仮構されたイコンであってステレオタイプ化された図像たちでしかなかった。以上のことから次のことが言えるだろう。

まず、A お袋の味は構図であって内容ではない。つまり、お袋の味は「内容」ではなく「形式」である。例えば、お袋の味にとって料理の中味やメニューは本質的なものではない。どんな料理であれお袋の味になりうるのだ。では、形式としての「お袋の味」が成立する要件とは何であるのか？　それは二つある。まずその一。「不在」あるいは「非現前」であること。つまり、かつてあったが今はないもの。かつては日常的であったが、今は日常世界に帰属していないこと。これは「疎遠」といいかえてもよい。それは、時間的疎遠でも B 空間的疎遠でも、あるいはその双方であってもよい。この疎遠は非現前の別名でもある。その二。再現されるべき非現前は仮構された物語であること。それは、社会的であれ個人的であれ、時間軸に沿った語り口を許す、C なんらかの文化資本を援用しうる非現前であること。これらの要件が満たされたとき、お袋の味は記憶装置として、D 時間軸に沿った同一性を幻想させる自己確認装置として起動してくることができるようになる。

確かに、味そのものは欠かせない要件である。それ自体を美的に享受する、味覚的に享受するということが、まずは第一目標になることは間違いない。しかしながら、同時にそれは記憶装置に転じるし、転じなければならない。転じなければお袋の味とは言わない。味覚的要素と同時に、あるいはそれに先んじてたちあがるのはむしろ「記憶装置」という機能である。ただし、純粋に味そのものが記憶をよびさますということは理論的にはありえても、実際には、それと逆のことがおこっている。「昔懐かしい味」、「あの頃の味」、「お袋の味」という表象設定がなんらかのかたちで事前におこなわれてしまっているのである。純粋に味そのものが少年時代やお袋を思い出させるには、目隠ししてとつぜん食べさせられでもしないかぎり不可能である。大抵は、事前に「お袋の味」であることが言表され、提示され、表象される。大抵は、「商品」として。そこで、享受者つまり「わたし」は消費者としてそれを選びとる。要するに、E 味覚そのものの前に、何重にも「お袋の味」を明示的に、あるいは含意的に指示する言説の層を通過して、はじめて味そのものに達するしかないのである。このようにしてはじめて達する「味」に、「お袋の味」、「少年時代」という言表内容があとづけ的に再確認されるにすぎない。つまり食事を味わいながら、事前にあたえられたお袋の幻像という表象のアミ[1]の目を再確認しているにすぎない。要は、時間的疎遠という表象の香辛料をまぶされた、中味は大量生産された他人の手になる食材を摂取しているだけなのだ。

次に記憶の中味であるが、少年時代あるいはお袋の味というとき、その記憶内容の射程距離は一見「個人」の過去にだけさかのぼるように見える。「自分のお袋」がつくってくれた「自分が食べていた味」。それは個人史のレベルにとどまっているように見える。ある意味で、それはその通りなのだが、それは同時に個人を越えた、というか個人を包みこんでいた当時の地域社会、文化、慣習、国家とまったく無縁であるはずがない。個人的体験のなかにどこかしら社会と照応するなにものかが、その記憶の中にはキョウメイ[2]せざるをえないからだ。例えば—私事で恐縮だが—小学生のときに食べた「鯨の刺身」は、当時の自分自身を個人的レベルでよびさますが、そこでよびさまされた自分は、東京オリンピック前夜のまだ貧しかった日本の社会的風景のどこかしらに嵌め込まれた自分として立ち現れてこざるをえない。そうして、初めてわたしは懐かしい鯨の刺身の味覚をとおして、あの頃の自分に邂逅し、そんな自分を通してあの頃を想起することができる。味覚によってよびさまされる記憶は、まずは個人的な様相を呈していても、同時にそれはあたかもメダルの裏表のように、その時代、その社会をもよびさますのである。つまり、お袋の味は個人的記憶装置であると同時に社会的記憶装置でもある。

さらに、記憶の共有システムが起動してくる。個人的な味の記憶が共同体の記憶に読みかえられてゆくシステムといってもよい。こうしたメカニズムは、あくまでも個人のなかで起きる、きわめて個別的で特殊で一回限りの体験である。かりに鯨の刺身から東京オリンピック前夜を多くの人びとが思い出したとして、しかし、その思い出の中味や陰翳や質はまったく別々のものだからだ。それでも、お袋の味という仕掛けは次々となされてくる。なぜなら、いかなる内容の社会的記憶がよびさまされるかということではなく、F いかなる内容の偏差であれ、社会的記憶がよびさまされること自

体が重要なのだからだ。個々人がそれぞれどんな記憶内容をよびさまそうが、それはさほど重要ではない。重要なのは、とにかく過去の個人的記憶をよびさますこと、個人的記憶の中に投影された社会的記憶をよびさますこと。つまり、時間軸で個人を確認させること、同時に時間軸で社会を確認させることこそ重要なのだ。それは、社会や文化あるいは国家そのものを、「時間軸に沿って同一性を保持したなにものか」として再確認させることである。時間軸に沿ってある現象の持続性を再確認させること、それは歴史意識をもつことにほかならない。本来、時間の経過にもかかわらず、あるできごとがいかなる本質的変化もこうむることなく、一定の自己同一性を保持しながら変化し存続していくという構図が、そのできごとの本質であるかどうかは疑わしい。ただ、一八世紀後半以降、そうやってものごとを観察するスタイルが誕生してきたことは確かだ。「歴史」という新しいものの見方であり、「歴史意識」という枠組みである。要するに、お袋の味というのは、きわめて希薄化して卑俗なかたちではあるが、歴史意識を再確認させるための文化装置であり記号装置なのである。

そして、二〇世紀前半、ナショナリズムを背景にして、歴史意識というのは、ほぼ例外なく国家主義的歴史意識とまったく無縁でいられたためしがない。当時、歴史意識の好例であったものは国家の歴史という図式であり、ステレオタイプ化した歴史意識の典型は、ナショナル・アイデンティティーを再確認するというスタイルだった。米国の歴史、ドイツの歴史、日本の歴史。どれもそうだ。そこでは、歴史の荒波をのりこえる「主体」は「国家」であり「国家」以外のものではありえなかった。そんな時代、じつは一見些細に見えるお袋の味も、個人的記憶を介在させつつ、社会や文化ひいては国家の歴史的同一性を「再確認」させるという役割をはからずも果たしてしまっている。釣りをして、友だちと遊び、夕方、母親手作りの料理を食べる。こうした少年時代の記憶は、本来は個人的なものであって、個人的なものでしかない。他人の記憶と交換不可能なものだ。しかし、きわめて特殊であるがゆえに普遍化することができないのは、じつは個々の少年時代の記憶の「中味」であって、当時の体験の「内容」だけである。お袋の味という仕掛けは——もうそれはお袋の味イデオロギー——といっていいだろうが——お袋の味という仕掛けは、個々の少年時代の記憶の「中味」はトウカンに付して、しかし、少年時代を思い出すという「形式」を普遍化しようとしているのだ。みなさん、思い出の中味はそれぞれ違うかもしれませんが、少年時代を思い出すことはできますよね。こまかい中味の違いはあるかもしれませんが、少年時代を思い出すことは、みなさん誰にでもできますよね。さあ、思い出してください。その表象世界はこう呼びかけているのである。何を思い出すかが重要なのではなく、とにかく思い出すことが重要なのである。

一旦思い出しさえすれば「誘導」はできる。少年時代のステレオタイプ化した記憶の中味を注入すればいい。誰でも共有できうるような、思い出の最大公約数を送りとどければいい。かつて一度も存在しなかったけれども、誰もが思いあたるような仮構でいい。都会でストレスの日々に追われるサラリーマンなら、少年時代の思い出に甘いノスタルジーを感じたがっており、そこにいくばくかの癒しを欲求していただろう。なぜなら、過去の記憶というものは、国家の歴史であれ、個人の思い出であれ、事実の正確な再現であるよりも、のぞましい物語への陽気な［　I　］を基本的な欲求としてかかえこんでいるからだ。あの頃は良かった、あの頃母は優しかった、あの頃の田舎は美しかった、あの頃の社会は素晴らしかった、あの時代は良かった。それは、どこにもありえたような、しかし、実際にはその形ではどこにもなかったような幻想である。

（原克『アップルパイ神話の時代　アメリカ　モダンな主婦の誕生』による）

問一　傍線部1～3のカタカナを、漢字（楷書）で解答欄に記せ。

問二　傍線部A「お袋の味は構図であって内容ではない」とは、どういうことか。この説明として最も適当なものを次のイ～ニから一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

イ　お袋の味とは目の前に出された料理を昔を懐かしんで味わうための合い言葉のようなものであって、実際の料理の味自体は問題ではないということ。

ロ　お袋の味とはそれがすでに失われたことを痛切に感じさせるための言葉でしかなく、現実にお袋の味が健在であるかどうかは問題ではないということ。

ハ　お袋の味とはもうなくなったり近くにはなかったりする何かを思い出させるための符牒のようなものであって、実際の料理の味の問題ではないということ。

ニ　お袋の味とは失われた過去を事実そのままに取り戻すための思い出作りの物語であって、実際に目の前にそれを出されるかどうかは問題ではないということ。

問三　傍線部B「空間的疎遠」とあるが、これを埋め合わせるための行動を何と呼ぶか。それを自分で考えて、漢字二字で解答欄に記せ。

問四　傍線部**C**「なんらかの文化資本」とあるが、筆者はこの傍線以降でそれを具体例を挙げて説明している。その具体例を二十五字以上三十字以内で本文から抜き出して、最初と最後の二字をそれぞれ解答欄に記せ。

問五　傍線部**D**「時間軸に沿った同一性を幻想させる自己確認装置」とあるが、これを個人レベルを超えて行う「装置」を、筆者は何と呼んでいるか。本文から漢字二字で抜き出して解答欄に記せ。

問六　傍線部**E**「味覚そのものの前に、何重にも「お袋の味」を明示的に、あるいは含意的に指示する言説の層を通過して、はじめて味そのものに達するしかない」とはどういうことか。この説明として最も適当なものを次の**イ**～**ニ**から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

イ　私たちが「お袋の味」と思っているものは、言葉やイメージにすぎないということ。
ロ　私たちが理想とするお袋の味は、結局「お袋の味」と銘打たれた商品に行き着くしかないということ。
ハ　私たちが思い描く「お袋の味」は、前もって刷り込まれた記憶を元に再現しているにすぎないということ。
ニ　私たちにとっての「お袋の味」は、様々な表象を取り除いてはじめて手に入れることができるということ。

問七　傍線部**F**「いかなる内容の偏差であれ、社会的記憶がよびさまされること自体が重要なのだ」とあるが、なぜそれが筆者の論旨にとって「重要」なのか。その理由として最も適当なものを次の**イ**～**ニ**から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

イ　過去の記憶は交換できるので、国家にとって都合のいい記憶を喚起させられるから。
ロ　自己や社会が、時間を超えて過去も現在も同一だと信じ込ませることができるから。
ハ　交換不可能な一回限りの出来事を、本質的で歴史的な自己同一性だと錯覚させることができるから。
ニ　物事の本質は時間の経過とは関わりがないので、かえって物事に本質的な意味を付与することができるから。

問八　傍線部**G**「お袋の味というのは、きわめて希薄化して卑俗なかたちではあるが、歴史意識を再確認させるための文化装置であり記号装置なのである」とはどういうことか。この説明として最も適当なものを次の**イ**～**ニ**から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

イ　お袋の味は、歴史に対する認識を希薄化しながらも、文化や記号に結びつける形式であるということ。
ロ　お袋の味は、それこそが自分の個人史の中心であることを再認識させることができる記号であるということ。
ハ　お袋の味は、限定されたものだが、故郷の文化を通して歴史への意識を改めて思い起こさせるものであるということ。
ニ　お袋の味は、思い出すという時間意識を利用して自己同一性の根拠を改めて知らしめるような仕掛けであるということ。

問九　傍線部**H**「お袋の味イデオロギー」とはどういう意味か。この説明として最も適当なものを次の**イ**～**ニ**から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

イ　お袋の味とは、個人の歴史を国家の歴史にすり替えるための思想だということ。
ロ　お袋の味とは、思い出を介して故郷という土地との関わりを回復させるための観念だということ。
ハ　お袋の味とは、個人的な思い出を普遍化することで、個人の尊厳を回復させるための装置だということ。
ニ　お袋の味とは、個人的な嗜好ではなく、ナショナリズムを刷り込むために国家レベルで機能する仕掛けだということ。

問十　空欄 **I** に入る最も適切な語を次の**イ**～**ホ**から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

イ　飛躍　　**ロ**　改竄　　**ハ**　再現　　**ニ**　同化　　**ホ**　表象

二

次の文章は『発心集』の一話である。これを読んで、後の問いに答えよ。

美作守顕能のもとに、なまめきたる僧の、入り来たつて経をよにたふとく読むあり。主聞いて、「何わざし給ふ人ぞ」と云ふ。近く寄つて云ふやう、「乞食に侍り。但し、家ごとに物乞ひありくわざをば仕うまつらず。西山なる寺に住み侍るが、いささか望み申すべき事ありてなむ」と云ふ。物ざま、むげに思ひ下すべきにはあらざりければ、こまやかに尋ね問ふ。「申すに付けて、いと異様には侍れど、ある所のなま女房を相ひ語らひて、物すすがせなんどし侍り

A

程に、はからざるほかに、1ただならずなりて、此の月にまかり当りて侍るを、『偏に我があやまちなれば、2殊更こもりゐて侍らむ程、彼が命つぐばかりの物あたへ侍らばや』と思ひ給ふるが、いかにもいかにも、力及び侍らねば、もし、御あはれみや侍るとてなむ」と云ふ。事の起りは、げにと覚えずなれど、3「さこそ思ふらめ」といとほしく覚えて、「いとやすき事にこそ」とて、おしはからひて、人一人に持たせて、そへて取らせんとす。此の僧の云ふやう、4「かたがたきはめてつつましく侍り。殊更そことは知られじと思ひ給ふるなり。自ら持ちてまからん」とて、持たるるほど負うて出でぬ。

主、なほあやしく思ひて、左様のかたに意得たる者一人を付けてやる。様をやつして、見かくれに行きける程に、北山の奥にはるばると分け入りて、人も通はぬ深谷に入りにけり。一間ばかりなるあやしき柴の庵の内に入りて、物うち並べて、「あな苦し。(注)三宝の助けなれば、(注)安居の食もまうけたり」と独りうち云うて、足うち洗ひてしづまりぬ。此の使ひ、「いとめづらかにもあるかな」と聞きけり。日暮れて、こよひ帰るべくもあらねば、木陰にやはら隠れゐにけり。夜ふくる程に、法華経を夜もすがら読み奉る声、いとたふとくて、泪もとどまらず。明くるやおそしと立ち帰りて、主に、ありつる様を聞こえければ、驚きながら、「さればよ、ただ者にはあらずと見

B

」とて、重ねて消息をやる。「思ひかけず、安居の御料と承る。しかあらば、一日の物は少なくこそ侍らめ。此れを奉る。なほも入らむ事候はば、必ずのたまはせよ」と云はせたりければ、経うち読みて、何とも返事云はざりけり。とばかり待ちかねて、物をば庵の前に取り並べて帰りぬ。

日来経て、「さても、ありつる僧こそ不審なり

C

」とて、おとづれたりけれど、其の庵には人も無くて、前に得たりし物をば、外へ持ちいにけるとおぼしくて、後の贈り物をば、さながら置きたりければ、鳥・けだもの食ひ散らしたるやうにて、ここかしこにこぼれ散りてぞあり

D

。

実に道心ある人は、かく、我が身の徳を隠さむと、5過をあらはして、貴まれん事を恐るるなり。もし、人、世を遁れたれども、6いみじくそむけりと云はれん、貴く行ふよしを聞かれんと思へば、世俗の名聞よりも甚し。此の故に、ある経に、「出世の名聞は、譬へば、

X

」と説けり。本の血は洗はれて、落ちもやすらん、知らず。今の血は、大きにけがす。愚かなるにあらずや。

(注) 三宝…仏法僧の三種の宝。　安居…夏の九十日間、特定の場所に籠もって行う仏道修行。

問一 二重傍線部**イ**～**ホ**の「に」の中から完了の助動詞を二つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

問二 傍線部**1**「ただならずなりて」とは具体的にどのようなことか。最も適当なものを次の**イ**～**ホ**から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

イ 女が身ごもったこと。
ロ 女が病気にかかったこと。
ハ 自分が官職を追われたこと。
ニ 自分が出家の身になったこと。
ホ 自分の修行の時期が近づいたこと。

問三　傍線部2「殊更(ことさら)こもりゐて侍らむ程、彼が命つぐばかりの物あたへ侍らばや」の意味として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

イ　彼が謹慎していた間も、せめて食事くらいは与えてやりたかった。
ロ　彼女がひきこもっている間くらい、私の食事の世話をしてもらいたい。
ハ　彼女が出産のために外出できない間だけでも、彼女に食事を与えたい。
ニ　私が世間を遁れていた間も、彼女の食事の心配だけはしてあげたかった。
ホ　私が修行のために庵に籠もった時には、どうか食事だけでも与えてほしい。

問四　傍線部3「さこそ思ふらめ」には、僧に対する主のどのような気持ちが込められているか。最も適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

イ　共感　　**ロ**　尊敬　　**ハ**　軽蔑　　**ニ**　称賛　　**ホ**　同情

問五　傍線部4「かたがたきはめてつつましく侍り」とあるが、僧がこのように言った真意はなにか。最も適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

イ　女との生活を邪魔されたくなかったから。
ロ　厳しい修行を人に誉められたくなかったから。
ハ　ただの物乞いであると思われたくなかったから。
ニ　あまりに粗末な住家を見られたくなかったから。
ホ　生活の糧を得るための嘘を見破られたくなかったから。

問六　空欄 A ～ D には過去（回想）の助動詞「き」か「けり」が入る。空欄に入る語の組み合わせとして、最も適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

	A	B	C	D
イ	ける	き	しか	き
ロ	ける	けれ	ける	し
ハ	ける	けり	し	しか
ニ	し	き	けれ	ける
ホ	し	けれ	けれ	ける

問七　傍線部5「過(とが)をあらはして」とあるが、この僧の場合、具体的にはどのようなことか。最も適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

イ　出家したにもかかわらず世の名声を望むこと。
ロ　嘘をついてまで人から物を得ようとすること。
ハ　人の好意をあえて踏みにじる行為をすること。
ニ　仏道修行の途中でも時おり世間に交わること。
ホ　僧の身で女性と関係を結んだなどと語ること。

問八　傍線部6「いみじくそむけり」とあるが、「そむく」とはどのような意味か。本文中から同じ意味の熟語（漢字二字）を抜き出して解答欄に記せ。

問九　本文の内容に合うものを次の**イ**～**ホ**から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

イ　僧を立派な修行者だと見込んでいた主の期待は、みごとに裏切られた。

ロ　主は僧のとった行動を通して、本当の道心とは何かを初めて理解した。

ハ　僧の修行は、結局は貧しい生活から逃れるための口実でしかなかった。

ニ　僧は自らを極限に追い込むために、敢えて主からの施しを無駄にした。

ホ　真の出家者を志した僧は、自分が愚か者だと思われるように振舞った。

問十　空欄 **X** には、ある慣用句が入る。次にあげる漢文がその慣用句の出典である。次の漢文を読んで、後の（1）～（3）の問いに答えよ。なお、設問の都合上、傍線部**7**以降の返り点・送り仮名をすべて省いてある。

（注）可汗　使レ謂レ休（注）曰、「我国人皆欲レ殺レ汝。唯我不レ然。汝国已殺ニ突董等（注）。吾又殺レ汝、猶以血洗血。汚益甚爾。吾今以水洗血。**7**不亦善乎。**8**/**9**

（『旧唐書』列伝による）

（注）可汗…北方遊牧民の君主の称号。　休・突董…いずれも人名。突董は可汗の叔父に当たる。

（1）傍線部**7**「猶以血洗血」を訓読するには、どのような返り点を付けたらよいか。解答欄の白文に最も適当な返り点を記入せよ。送り仮名等は書かないこと。

（2）傍線部**8**「血」とあるが、「血」で譬えるのに最も適当な本文（『発心集』）の中の一語はどれか。次の**イ**～**ホ**から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

イ　安居　**ロ**　名聞　**ハ**　世俗　**ニ**　徳　**ホ**　過

（3）傍線部**9**「不亦善乎」の意味として最も適当なものを次の**イ**～**ホ**から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

イ　これまた善いことではない。

ロ　善いことだとはかぎらない。

ハ　はたして善いことだろうか。

ニ　なんと善いことではないか。

ホ　きっと善くないに違いない。

〔以下余白〕